HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小序
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Issue Date	1966
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/77286
Type	manuscript
Note	『鈴木榮太郎著作集６（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内での言及による）。; 資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
File Information	X062_01.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小序

まだ書き加へたい事項が相当に残つて居るけれどもこれで一先づ上梓する事にした。この書は恐らく私の遺稿となるだらうと思ひながら書いて来たので、これが生きて居る間に出版される事が出来る丈でももつけの幸である。

昭和二十二年北大に来た時以来私の研究は都市社会学に集中した。私の北大に於ける社

会学特殊講義は其後約十年間毎年都市社会学の問題

で次々と新らしい章（一章か二章づゝ）を取扱って来たが、終

いに三十一年の講義で私の都市社会学の体

系をなす全十章を一應終へる事が出来た。こ

ゝに公にする本書は右の講義案に少しばかり

推敲を加へたものである。

私は北海道に来て以来殆どずっと闘病しなけ

ればならなかったが、然し少しばかりも元気が出

れば右の講義案の作製に專念した。よい研究

をしてよい講義をしたいと思ふ気構へ丈に生

とともに同一の

き甲斐を感じ、又それが精一杯であったか、ら私は公私の関係に於いて義理を欠き禮を失する事ばかりであった。北大文学部教授会の暖かい庇護がなければ私のこの研究も勿論完成しなかったものである。

この一章の中の論理を完成するまでは死んではならぬと思った事が何度あるか分らぬ。そんなにして全十章をとにかく完成する事が出来て、それを生きて居る間に上梓する事が出来たのは夢の様な幸である。

私が都市社会学の研究に志したのは終戦直後昭和二十一、二年頃、私が東京でCIEの世論調査課に顧問をして居た頃、アメリカの社会学者、心理学者、人類学者達からアメリカの社会学界の現状について色々話しを聞いて居た頃の事である。アメリカでは澤山の社会学者が澤山の分野に分れて皆希望と自信をもって忙しく立ち働いて研究に従事して居る様に思はれた。農村社会学、都市社会学、教育社会学、犯罪社会学、産業社会学、政治社会学、世論調査研究など分

野は甚だ多数で、それぞの分野毎に或る皆
程度の業績が積まれて居る。社会に関する全
般的な理論は貧弱であるかも知れないが、そ
れぐの分野で少くとも常識を整理した丈の
理論は構成されて居り、更に実に関する調査研
究は次々に活発に積まれて居る、と云ふのである。
考へて見れば私共は実際生活において常識
を、しかもそれを何等整理して見る事もしないで
判断の基礎として居る場合が頗る多い。◎自分量で
判断するのに比すれば物指や計量器を用ゐる

◎学問の世界においてもさうである場合が多い。

し、その物指しで余りあてにはならぬものかも知れぬ。けれども
部分を測定する物差しか与へられないことに変りは無い。全
体を測る中心となりますか。
物指しがありやなしや。
正しい経済学の

㊉ 社会生活の各方面に計量器が用ひられ、様々なれば、それが
実際の社会生活に正しい判断の基準を与へると考へ、
社会の機構を経済原則も修正的な前進させるのは当然である。
まだ計量器にかけられないのない法則的なものが、まだ経済社会
の網の中には残って居よう。

事物は甚だ大きな進歩である。各分野の社会学は社会的事実に関して自分学によって物を言ふ事を止めて物としての社会事象に関して中心はなく二つの物指（計量器）を用いて観察する丈に過ぎないかも知れぬが、然しそれは来るべき進歩である。社会全般に関する抽象的な統一的理論に誰も関心がない譯ではあるまいが、学問の世界にも庶民の仕事は澤山ある。各分野における社会的事実に関し周到綿密な観察を試み物指を用いて整理しその小さな領域丈に通ずる概念の整理を試みる傾向を発

回 もしかしたら、自分自身の判断によって考へ方は節操ある我々の世界から全く追放される時が来て居るのかも知れぬが

気したりする学問的庶民の小さな仕事は澤山になければならぬ。併し誰も大将にならなくてもよい。誰もが最高の理論に没頭しなくてもよい。殊に一定の人達が大将になるのは甚だ危険である。そんな考へ方に今更ら思ひ至ったと云ふ譯ではないか、それは私には一つの新らしい活力となった。

それから日本の社会はやはり日本の学者によってのみ最も正確に観察され得ると云ふ事である。私は外国人の日本の理解はどんなに進んで居る場合でも決して充分でない事を

＃ これらは意識までの世界の出来事であって、意味は未解明的に（多分に）

伝統的であれ、私共は、黒田人に伝わる意味は甚だ皮層

の意味しかない。私共は自分の妻の心すら充分に讀みとり得な

いですらあるではないか。

他村から養子に来た若者は一代の間（死ぬまで）正式の養子（氏）の資

格を認めぬ土地もあるくらいである。

嫁の作法になれはじめて平民（わが村の子）になる。

本当である。村人の世界に入る意味の世界に下達ない

化する為には二代三代の共同体の共同体験が必要なのである。

よく知った。異国人には越え難い限界がある。※日本の学者の世界の学界に対する最高の貢献は矢張り日本にも存する事実に関する研究であるべきである。少くとも日本における社会的事実の究明は日本人の手によってこそ最も正しく建設される筈である。考へて見れば日本における社会的な事実にして未だ充分に科学者の眼光の下におかれたことのないものは甚だ多い。都市にはまだ沢山な未踏の領域が残って居る様に思へた。

私は日本の都市に関して若い日本の社会学者達が

もっと活発に積極的に調査研究するとよいとは前からも思って居ないでもなかったけれども、~~外国人の学者達を活用して居るのにしきりに~~その頃その希望が強くなった。そこでその頃よく話す機会のあった若い東大の研究室の諸君に都市社会学を勉強~~したらどうかと~~する様にすゝめて見たが皆既に没頭して居る研究があるので、それは~~不能だ~~都合が悪いと云ふ事であった。その時私はもう五十を越して居たが、それなら私自身で始めからやって見やうと心に決した。日本の社会学の発展の為には民俗野

人も一人でも多くの一兵士が帰還する事が望ましい様に思はれたからである。日暮れて道遠く行き着くまでには離れるかも知れぬとは当然に思った事である。

私はその頃まで農村社会学の研究に専念して居た。その研究する項目は次ぎ次ぎに私の興味を惹いては居たが、農村社会学の研究を更に深めて行く意味からも、その最近縁の分野としての都市社会学の研究にも関心が無かった訳ではない。私は興味があったものであるから関心は常に持って居た。唯専念するよい機会が出来なんだと云う丈である。

本来都市社会の研究にはアメリカ其他日本にも多数の学者の業績は既に現はれて居る。私がこの歳をしておくればせに此分野の研究に加入して邪魔になる蛇足を加へる必要はないのであるけれども私には村落の研究に従事した二十年近くの経験がある。その経験で学んだ村落に関する知識はアメリカの都市社会学者も日本の都市社会学者も全く生きて居ない。けれども都市の構成原理には村落の構成原理が無関係であるはずはないと云ふ予想が私の頭を去らず、私は都市を理解するに甚だ恵まれた條件をもって居るのかも知れぬと云ふ虫のよい考へもおこり、その事が私をして都市社会

学者の研究に敢然と近かづけた最も根深い原因であったに違いない。

けれども私は最初は日本及びアメリカに於ける都市社会学者の業績を[illegible]紹介して日本に於ける私なりに考へる都市社会学の問題点丈でも述べてそれで一応の捨石の役を果したいと思ったのであった。

私が北大にきたのは昭和二十二年九月であったが、その年の十二月に北海道に於ける私の最初の論文として「都市の政治性」と題する一文を草した。これは私が発病する前に書いた都市に関する唯一の論文である。「健民」と題する雑

読のおれ書いたのである。その論文は次の年の三月号に掲載されてあったのであるが、丁度その頃から病床に倒れその後長い療養生活に入つたので、その雑誌は未だに見る機会を得ないでいる。(何しろ混沌無秩序の時代であったから、どこかに紛れ込んでしまったのであろう)

私は物に凝る性分であるから都市社会学を考へ始めれば（だすと）それ丈に心を奪はれて居た。病床から起きてからは都市社会学に関する本をよみあさると共に、曽て農村社会学の

始めから

見本として

研究に企図しようとされ慣れたはもさうであつた
様には當時大規模の小さい異常で單純な都市を調
査して、それに都市の構造の縮圖を見出さうと企圖した
事であつた事もあつた。けれどもその希望は結局は
絶り暗中模索の時代が暫くつづいた。（奥井復
太郎氏の「現代大都市論」をしみじみと讀み返して
見て、氏著の優れた内容に今更らの様に感服し
たのもこの頃で（から間もなく）木内信義氏の「都市地理学研究」と磯村
英一氏の「都市社会学」が公けにされた。私が拙な
い経験を加へて社会学における此方面の発展

私の肉体が病魔に犯されて行くのには無関係に、

のがれ捨てられない。必要もなかった(はない)と思ってた事
もあった。けれども私の研究の興味は燃えさか
るばかりで、都市の複雑であればある丈、都
市に関する(アメリカや日本の)諸学者の理論に残されている問題や(徹底した点)
(不満の点)矛盾を見出せば見出す程、私の探究の意欲は
益し(増し)て行くばかりであった。けれども私の病気
は生死を往来する様な事態を繰り返していた
。都市の社会構造に関する見解が出来た時(から)
はこれで死んでもよいと思った。(死ぬ程うれしかった。)都市の機能を明
らかにする事が出来た時はやはりそうであった。(うれしかった。)

其の後俄かに突破口が出来た様に研究は気持ちよく進んだ。少し勉強しては倒れ、病床生活が相当につゞいて元気をとり戻しては又執筆して倒れては又倒れると云ふ事を繰り返して居た。その十数年も完成すれば、もう死んでももよいと何度思ったかわからない。昭和三十年夏から化学療法を用ゐ、三十一年春からはもう色々の危険状態はおこらなくなった。

よくもこの病気に堪えよくもこの一書が完

成したものだと我ながら不思議に思って居る。業なかばから此本は偶然に遺稿から出版されるに違いないから正しく讀まれる様にとて
（ノート）原稿の乱雑な行文を誤りなく誰にも讀み易くする為にいつも心をくばって居た。自分で書いた原稿で出版出来た事は夢の様な幸と思ふ。

私は先に社会学の一兵卒の研究として社会の各分野における調査研究に従事する事に建設的な意義がある事を述べたが、私は社会学の研究は社会生活における基本的な構造の究

明と云ふ事に研究の目標を期待すべき
ものと考へる事は昔も今も変らないが、そ
の事と社会生活の各分野の調査研究と云ふ
事とは矛盾がある様に思へるのであるが、然し
それは根拠なき事ではない。私のこの都市社
会学は都市生活の基本的な構造の究
明を企図して居るものである。然して又それは事実
に関する調査研究をよそにして論述されて居る
ものでもない。私は都市に関しこんな大それた科学的処
理の一端をこの本の中で果してみやうと試みて

⑥

賢明な人ばかりの席上では話しは一向に遊ばない。（シーンとした）一人の男が若か

恥知らずの口をきけば話題はそこから進んで行く。

私の氏本様が都市社会学の席上ル話題

を作られる男が若者の夜業が要である。

結口ルでもなり縁然ば（と思って居る。）

居るのである。~~北大の中谷宇吉郎さんが試みたやきもの撮影の結果現れたと推定~~ 小ある。

私の都市計画学の研究に國の内外の先輩諸学者に学ぶところが相当に多かった事は当然であるが、然し私のこの研究に最も力となったのは私の教室の助手達と学生達であった。私のこの研究は全くそれ等の諸君との協力によって完成したものである。私の二人の助手笹森秀雄君と富川盛祥君が私の手となり足となり私自身が試みるよりもずっと活潑に正確に測定してくれなかったらこの研究

はとても成就出来なかったものである。

昭和三十二年春

札幌市の寓居にて

鈴木醇太郎識